

▲三輪トラックの荷台に乗る二人(北方町)
昭和27(1952)年頃 磯貝光子氏提供

表紙の写真は、槇峰橋のたもとで撮影されたもので、バイクのような乗り物は日本内燃機製の「くろがね」ブランドの三輪トラックです。オート三輪とも呼ばれた三輪トラックは、小回りが利くうえに悪路に強いという特徴から、戦後の復興期を支えた貨物自動車です。一方で、転倒しやすいなどの欠点もあり、一九六〇年代には安定性と快適性を備えた四輪トラックへと代わっていきました。

左の写真に写るダイハツ製の三輪トラックの荷台には「薪炭業」の表示があり、薪が積まれています。生活を送るうえで欠かせない燃料であった薪と木炭も、一九六〇年代には石油やガスへと移行していきます。

これら二枚の写真は、槇山で隆盛を極めた槇峰地区で撮影されたことも含め、一つの時代を物語る貴重な写真です。



▲木材を積んだ三輪トラックに乗る子ども (北方町)
昭和30年代～40年代 磯貝光子氏提供

市史編さん事業では、古文書や古写真はもとより、さまざまな延岡に関する資料の収集を進めています。こうした資料については、市民の皆さまがその資料的価値に気づかれていないことも少なくないと思います。

そこで、今号では、これまで「広報のべおか」や「市史だより」にて実施した資料提供の呼びかけに際じて、ご提供いただいた資料の一部を紹介いたします。今回ご紹介する資料は、形や内容も様々です。どの資料もどこか懐かしさを覚えるもので、新たな延岡市史の資料となりえる貴重なものです。

そのほか、たとえば、戦前・戦後の市内地図を含む観光案内、地区や団体が発行した記念誌、絵葉書、各種イベントのパンフレット、同窓会やPTA関係資料、卒業アルバム、各種店舗のポスターなども資料となりえます。

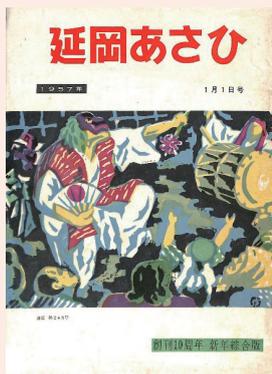
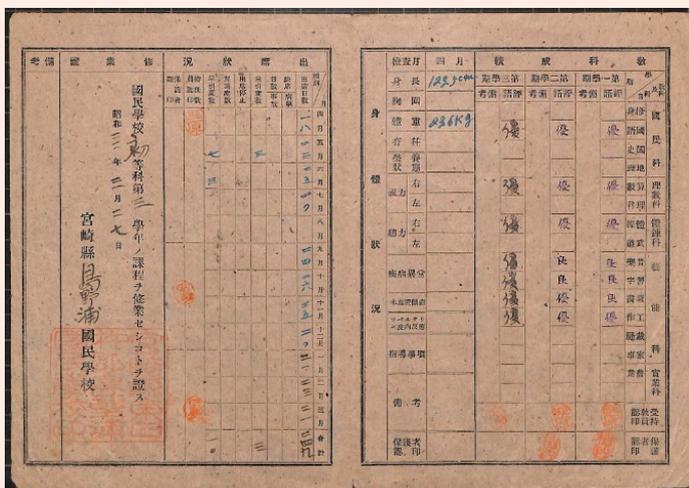
また、戦前から高度経済成長期にかけての市内各地の風景、地区の行事、家族の日常など、その時代を切り取った写真も貴重な資料となります。

ご自宅や公民館、勤務先などにこうした資料はありませんか。また、昔の延岡についての思い出や体験などについての情報も募集しています。

一方で、このような資料には大切な思い出があり、ご自身で管理されたいものもあるかと思えます。資料の提供を受ける際には、資料の撮影やデータ化などの形で対応させていただきたいと考えています。心当たりがありましたら、ぜひ文化財・市史編さん課までご連絡ください。



左は昭和21(1946)年度の島野浦国民学校の通知簿です。昭和19年度から昭和22年度までの通知簿の提供を受けており、教科や出席状況について戦争末期から終戦直後の状況をうかがい知ることができます。右は昭和22年頃の島野浦小学校です(『延岡市立島野浦中学校創立50周年記念文集』より引用)。当時は、島野浦中学校も併設されていました。【塩谷サツキ氏提供】



旭化成工業株式会社延岡工場が発行した雑誌「延岡あさひ」の昭和32(1957)年の創刊10周年・新年総合版です。工場の様子や、社員の生活などが掲載されています。

【甲斐盛豊氏提供】



延岡駅と南延岡駅で販売されていた駅弁の包装紙です。調製印から昭和38(1963)年に製造された駅弁であることがわかります。駅弁の包装紙には、城山の鐘、鮎(鮎やな)、旭化成の工場がデザインされています。

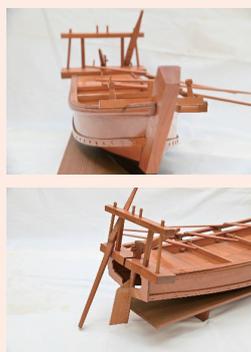
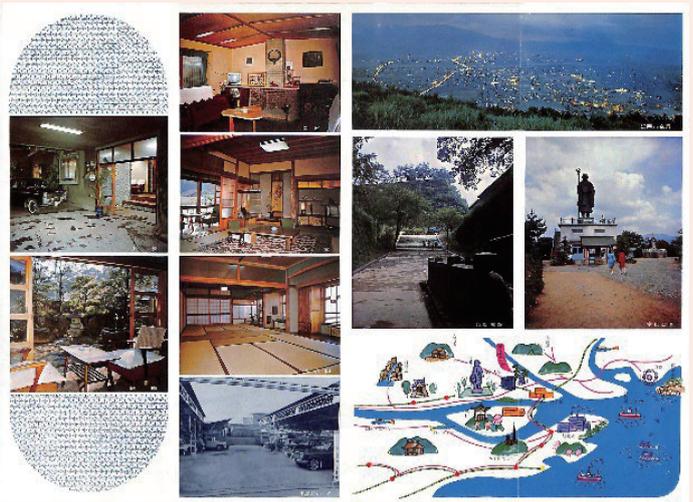
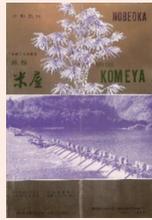
【個人提供】



延岡高等女学校校友会誌「藤の下蔭」の大正3(1914)年に発刊された第1号と同15(1926)年発刊の第10号です。延岡高等女学校は、延岡藩主であった内藤家が私財を投じて創立した宮崎県下で初めての女学校である「女兒教舎」から続く、女子教育の中核でした。校友会とは今という部活動のような活動です。誌名は校章の藤にちなんでいます。在校生も卒業生も内藤家への感謝の想いが強く、内藤家の家紋である「下り藤」への敬愛の念も現れている誌名です。

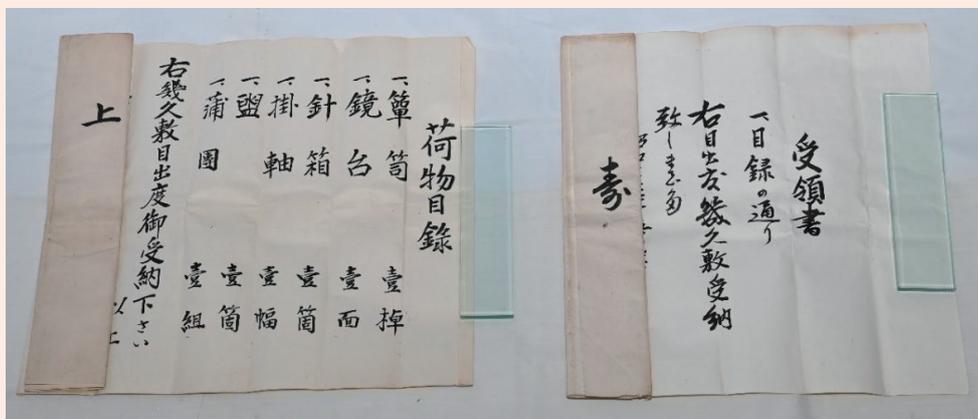
【寺原八千代氏提供】

米屋旅館（山下町）のパンフレットです。旅館案内図には、周辺のランドマークとして、延岡駅や今山神社のほか、アツマヤデパート、有楽映劇、日本興銀祇園町支店といった現在ではなくなった施設も示されています。これらのランドマークから、このパンフレットは昭和30年代中頃に作成されたと考えられます。【甲斐盛豊氏提供】



北浦町市振地区で活動したまき網漁船の模型です。こちらは親交のあった島根県浜田市の大下船具店が実際の船を模して製作したもので、提供者も精巧に作られているとおっしゃっていました。北浦町では、昭和23（1948）年以降、特産の鰯が不漁期に入り、活路を求めて県外へ出漁しています。そのひとつが島根県浜田市でした。北浦町と浜田市との交流を知る資料といえそうです。

【渡部嘉子氏提供】



昭和27（1947）年の結納品の受領書と婚礼道具（いわゆる嫁入り道具）の目録です。当時の婚礼の様子を知る貴重な資料です。

【石崎篤子氏提供】



山下通り新天街にあった呉服洋品店『かねますや』の昭和36（1961）年のカレンダーです。カレンダーに描かれているのは俳優の若尾文子さんです。昭和31（1956）年の『日向日日新聞』には、「大師まつり」とアーケード完成を祝う広告の中に「かねますや呉服店」の名前が掲載されています。

【石崎篤子氏提供】



「川塚興行ニュース」と名付けられたチラシでは、安賀多町にあった映画館「旭館」などで上映される作品情報を紹介しています。昭和30（1955）年公開の作品が紹介されていることから、昭和30年代に発行されたものと推定されます。

【個人提供】



上：家族写真 大正11 (1922) 年、北川町
 下：出征前写真
 昭和12 (1937) ~15 (1940) 年頃、北川町
 【個人提供】



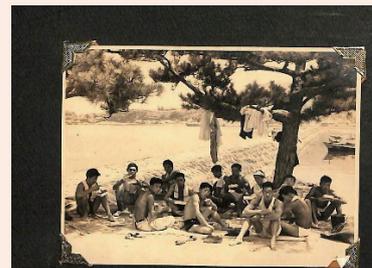
右：結婚写真 昭和12 (1937) 年、第二平田写真館 (祇園町)
 左：家族写真 昭和14 (1939) 年、朝鮮電業虚川江第一発電所本社宅
 【小田陽子氏提供】



右：鮎やなを背景に 詳細不明
 左：川舟が浮かぶ川 時期不明
 【個人提供】



右：桃の節句 戦前、北方町
 左：家族写真 戦前、北方町 【磯貝光子氏提供】



昭和20年代末~30年代に同僚たちと
 上：詳細不明
 下：日高保三郎翁頌徳碑前 (妙見町)
 【個人提供】



右側：思い出 昭和35 (1960) 年、長浜海岸など
 左側：愛宕山から望む市内 昭和35 (1960) 年 【個人提供】



レーヨン幼稚園の城山遠足 昭和30年代
 【小谷保英氏提供】

カルチャーゾーンフェスタを行いました！

令和四年十一月三日、カルチャープラザのべおかや延岡城・内藤記念博物館を会場にカルチャーゾーンフェスタが開催され、様々な催しが行われました。

文化財・市史編さん課では、市内遺跡での出土遺物やこれまで市民の皆さまから提供いただいた資料の展示を行ったほか、提供いただいた糸車を用いて糸つむぎ体験を行いました。

資料を提供いただいた皆様、当日ご参加いただいた皆様ありがとうございました。



子どもたちが糸つむぎを体験



市史編さん事務局による資料提供の呼びかけに応じて、紡糸車を提供していただきました。いわゆる糸車です。この糸車は保存状態が良好で、くるくると回すことができたため、カルチャーゾーンフェスタに来ていただいた方にも回してもらい、糸つむぎを体験してもらおうという運びになりました。

今回、糸をつくる原料は、綿です。糸をつくるにあたり、NPO法人コノハナロード延岡市民応援隊より綿花を提供していただきました。こちらの綿花は、応援隊の皆さんが、旭化成のベンベルグ工場から綿の種を譲り受け、のべおか花物語が開催される五ヶ瀬川河川堤防で育てたものです。

当日は、多くの子どもたちが参加して、一連の糸つむぎの流れを体験しました。

最初の「ワタくり」は、綿花からワタと種を分ける作業です。一個やってみると、どんどんしてみたいくなるようで、夢中になって分けていました。

次に「ワタうち」は、弓のようなものを使って、ワタ毛をほぐす作業で、力が必要なので、小さな手で懸命に何度も弦をひっぱって頑張っていました。

最後に糸車を用いた「糸つむぎ」です。この作業がとても難しく、糸車でヨリをかけようとすると、糸が切れてしまいます。でも子どもたちは器用で、何度も挑戦してだんだんコツをつかむと、するとヨリがかかり、上手に糸をつむいでいました。

糸つむぎの流れ

カルチャーゾーンフェスタ

STEP1:ワタくり

綿花から種を取り除きます。色々な方向からむしり取りたくなりますが、種をまわしながら一定の方向に引っ張ると、より余すところなく分けることができます。



STEP2:ワタうち

種を取り除いたワタ毛を、綿打ち弓を使ってほぐします。細かく揺り動かすことで繊維がほぐれ、糸がつむぎやすくなります。よくほぐしたワタを薄く平らに広げ、その上に丸簀をのせ端からコロコロと丸めて、空洞のワタ棒をつくります。



STEP3:糸つむぎ

ワタ棒からワタ毛をひきだして、指先でねじり合わせ糸を作ります。指先でヨリをかけた糸の先端を糸車に取り付け、はずみ車を回すことにより、ワタ棒から糸をつむぎます。



【糸車の使い方】

- ① 指先でヨリをかけた糸の先端をツム先に取り付ける。
- ② 左手でワタ棒を持ち、右手でははずみ車をまわす。
- ③ はずみ車の回転に合わせてツム先がまわされ、ツム先はヨリをかけながら、糸をつむいでいく。

中世部会



▲ 今山八幡宮での調査風景

今山八幡宮が所蔵する今山八幡宮文書の原本調査と写真撮影を行いました。このうち、応永二十六(四九)年の「今山八幡宮旧記」については、同宮の定例神事などについて記述があるほか平安末期から鎌倉期にかけての延岡市域における領主支配をうかがうことが出来る貴重な史料です。

また、文書の調査と並行して、石造物の調査も進めており、貝の畑石塔群や土持卒塔婆の現地調査を行いました。

古代部会



▶ 梓山での現地踏査風景

古代官道ルートへの検証作業を継続的に進めており、現地踏査を開始しました。

近世絵図や『上井覚兼日記』『宇目梓山覚書』などの文献史料をもとに、豊後と日向の国境に位置する梓山から北川町八戸地区を結ぶルートについて推定し、現地踏査による検証を進めています。

検証にあたって、地区の事情に詳しい方への聞き取りをする場合がありますので、ご協力をお願いします。

考古部会



▲ 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館での調査風景

延岡市には大貫貝塚や南方古墳群など多くの遺跡が確認されており、その発掘調査には鳥居龍蔵博士など県外の研究者も関わっています。そのため、発掘調査の記録類や出土遺物の一部は、県外の大学や博物館に所蔵されています。

こうした資料は遺跡の内容や時期を理解する上で大変貴重なものですので、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館など県外の研究施設での調査にも取り組んでいます。

民俗部会



▲ 島野浦島開発総合センターでの調査風景

地域文化を把握するための市内巡視を北浦町、北川町、島浦町などで行いました。

また、市内各地に伝承されている年中行事のほか、人生の節目に営まれる儀礼や風習について、市内の全区を対象にアンケート調査を実施しています。

市内各地の祭礼や民俗芸能について、新型コロナウイルスの感染状況を考慮し、順次調査を進めていくこととしています。

近現代部会



▶ 岡富小学校より提供のあった学校史料の一例

史資料編において教育関係史料を収録することとし、市内学校の所蔵史料のほか、明治大学所蔵の「内藤家文書」、宮崎県文書センター所蔵の「宮崎県公文書」などの史料調査を進めています。

「宮崎県公文書」については、その量質ともに近代史料として特筆すべきものであることが「宮崎県史・史料編近・現代1」などで触れられており、新たな延岡市史でも大きな柱として位置づけています。

近世部会



▲ 高千穂町コミュニティセンターでの調査風景

高千穂町で原本調査を行った「日州古今治乱記」などの筆耕作業を進めたほか、近世延岡領主の有馬氏に関する史料として、青梅市吉川英治記念館所蔵の「丸岡有馬文書」の調査を行いました。

『宮崎県史』の編さん時に行った史料調査では、延岡市域においても個人や公民館等所蔵の史料が確認されています。これらの所在について、改めて確認を行うこととしていますので、ご協力をお願いします。

市史編さん事業

歴史講演会、市史編さんの近況、史跡巡りを開催しました。

令和五年二月二五日、市史編さん事業として、歴史講演会、市史編さんの近況、史跡巡りを開催しました。

◆歴史講演会



▲ハーモニーホールでの歴史講演会の様子

明治大学文学部教授の落合弘樹氏(延岡市史編集委員会副委員長兼近現代部会長)を講師に迎え、「西南戦争と西郷隆盛と和田越・可愛岳・城山」の演目でご講演いただきました。

明治二〇(一八七七)年に勃発した西南戦争。その特徴として、強大な軍事を有した薩軍二万二千人が編制されたことを挙げ、そしてなによりも、その薩軍に西郷隆盛という象徴的人物を伴ったことが最大の特徴であったと説明されました。

北上を開始した薩軍にあって、西郷隆盛は積極的に関与しておらず、一貫して後方にとどまっていた。政府軍が戦況を有利にし、戦線が宮崎県内へと移り、延岡へと北上し、和田越で決戦を迎えます。この和田越での戦いにおいて、西郷隆盛ははじめて前線に立ち、自らの意思を反映するようになったと指摘されました。

このことが、可愛岳を突破したのち、鹿児島に帰還し、城山で西南戦争の幕を引くという決断に影響を及ぼしたのではないかと示唆されました。

また、西南戦争と延岡の関わりとして、延岡隊が編成され薩軍として参戦したことや、延岡が薩軍の兵站と医療の拠点であったことが紹介されました。そして、拠点を支えた延岡の人々への配慮もあり、薩軍が延岡市街地から撤収する際には、佐土原や門川のように焦土作戦を実行しなかったという話も紹介されました。

西南戦争という、近代日本の大きな転換期において、延岡が様々な形で関係していたという内容に、講演を聞いた市民の方々も大きな関

心を寄せていました。

◆市史編さんの近況

講演会終了後には、延岡市史編集委員会事務局(文化財・市史編さん課)より、市史編さんの近況として、令和二年度からの主な活動実績について説明しました

続いて、調査事例について、考古部会より縄文時代早期の大貫貝塚での調査の近況について説明しました。

はじめに谷口武範部会長より、出土した貝類の年代測定などを通して形成時期の特定に取り組みとともに、貝類などの分別や貝塚周辺のボーリング調査を進め、当時の自然環境について検討していくことを説明しました。

次に、延岡市教育委員会より、大貫貝塚の様子について説明し、九州でも最古級の貝塚と推定される大貫貝塚の今後の調査への期待を述べました。

◆史跡巡り

午後からは史跡巡りが開催され、参加者は二台のマイクロバスに乗って、西南戦争における西郷隆盛の延岡での足跡をたどりました。

明治二〇年八月二日に延岡入りした西郷隆盛が最初に宿陣した山

内善吉宅跡をはじめ、同二五日の和田越の戦いまでの足跡をたどりました。

和田越では、現在も残る塹壕跡を三か所で現地確認したほか、官軍の山縣有朋が陣頭指揮を執った檜山を望み、延岡を舞台に戦闘が行われた古戦場に想いを馳せていました。

【ルート】

- ① 山内善吉宅跡
- ② 原時行宅跡
- ③ 五ヶ瀬川豊後口
- ④ 西郷茶屋
- ⑤ 吉祥寺
- ⑥ 和田越記念碑前
(※塹壕跡等現地見学)
- ⑦ 山縣有朋陣頭指揮の地



▲和田越での塹壕跡の現地確認の様子

デジタル化した『延岡新聞』の一部を公開中!

延岡市立図書館が所蔵している『延岡新聞』は過去の地元紙で、当時の出来事や郷土の歴史を知るうえで貴重な資料です。国立国会図書館にある一部を除くと、延岡市立図書館にしか所蔵されていません。

延岡市立図書館では、この『延岡新聞』を後世に残し、いつでも皆さんに提供できるよう新聞のデジタル化に取り組んでいます。新聞は時代によってサイズが異なりますが、令和3年度からA3サイズ未満の延岡新聞のデジタル化作業を始め、令和4年12月22日に図書館内での公開を開始しました。

延岡市立図書館では今後、A3サイズ以上の新聞や延岡に関する様々な資料のデジタル化を順次行っていく予定としており、市史編さん事業でもこれらの活用を進めていく予定としています。

※『延岡新聞』の閲覧に関するお問い合わせ先:延岡市立図書館(0982-32-3058)



公開している『延岡新聞』

- ・昭和 5年 1月 ~ 昭和 7年 5月
 - ・昭和23年11月 ~ 昭和26年 6月
 - ・昭和29年 1月 ~ 昭和30年12月
- ※欠号している部分があります。

◀昭和5(1930)年4月2日の『延岡新聞』

一面に「祝延岡の新興」と見出しが付けられ、前日に延岡町、岡富村、恒富村が合併し、新たな延岡町としてスタートしたことを祝した記事が掲載されています。それから3年後の昭和8(1933)年2月11日には、延岡町は市制施行に伴い延岡市となり、令和5(2023)年に市制施行90周年を迎えました。



編集後記
～三十一日の夕方から～

先日、延岡市立図書館で開催された市制施行五〇周年記念フィルム(昭和五十七(一九八二)年度)の上映会に参加しました。その中で印象的だったものがゴブラ事件です。

ゴブラ事件とは一九八〇(昭和五十五年)に発生した事件で、西階公園で開催された移動動物園からゴブラが脱走したというものです。西階地区を中心に市民を震撼させ、全国ニュースで取り上げられたほど大きな話題となります。大規模な搜索活動を行ったものの発見できず、越冬できないという専門家の意見を踏まえ、対応を終えています。

このゴブラ事件、皆さんは覚えてますか?そもそも知らないという方も多いのではないのでしょうか。

昔はこうしていた、ここにはこの店があった。世代の離れた家族や友人、職場の同僚などと会話する際に、ちよっと昔の延岡を話題にしてみませんか。ゴブラ事件や城山の動物園はどの世代まで知っているかなど、盛り上がりと思えますよ。

そして、もしよかつたら、特にジェネレーションギャップを感じた内容など、市史編さん係までお寄せください。

(市史編さん係員K)

